

令和6年度 幼児教育研修（年齢別担任研修5歳児・第3回）

「子どもの発達と保育者の関わりについて」

日時：令和6年10月23日（水）15:00～17:00

会場：ギャラクシティ

講師：帝京科学大学 非常勤講師 日色 智絵 氏



前回の振り返り（公開保育からの学び）



子どもの発想を引き出しながら 保育者もアイデアを出す

- ・子どもとの信頼関係が基盤
保育者のアイデアも、自分の思いに合わなければ子どもは選ばない、断れる。
➡「どうしてこうか」と考えられる。
- ・保育者がアイデアが豊富なことも大事
子どもの内面を感じ取り、共有・共感するタイミングや状況を見極めることで、アイデアを出すか出さないかが決まってくる。
➡子どもの思いと合っているのか振り返りが常に必要。横並びのまなざしが大切である。

子どもの主体的な活動を促す 保育士等の多様な援助

一緒に遊ぶ・共感する・助言する・提案する・見守る・環境を構成するなど



同じ子ども、同じような場面であっても、**その時の状況によって援助の在り方は一律なものではない。**
子どもが十分に主体性を発揮できるよう、**状況に応じて多様な方法で適切に援助していく**ことが求められる。
多様な援助に支えられて、子どもの情緒が安定し、**自ら行動を展開していく中で豊かな体験を得られるようにすることが重要**である。

グループワーク：持ち寄った写真を通して他園の保育から学ぼう

- ①自分の事例を伝える。
- ②視点を1～2つもち、話し合ったことを付箋に記入する。
- ③話し合った記録をみんなで見合っていく。
- ④感想を伝え合う。

（視点）

- ・10の姿の視点から
- ・主体的と思われる姿
- ・子どもの成長発達に大切だと思った姿
- ・遊びこむために大切な保育者の関わり
- ・保育者の関わりや環境づくりに大切なこと



できるかできないか保育者は先に考えてしまうが、やってみるにはどんな風にしていくと良いのかを子どもと考えていく。

他のグループのまとめを見た時、同じ気持ちをもった意見が出されていたのを見て、安心感が得られた。

自分の関わりは良かったのかを考える。

面白さを見つける、子どもが発見する姿は、次への活動につなげていく保育になる。



日色先生から講評



- ・タイトルがあってすごくいい！子どもの姿がイメージできる。保育者の思いが伝わる。
- ・自分の気づきや思いを文字にして伝えられている。
- ・1枚の写真から広がる世界、遊びの背景が語られていた。
- ・一つの場面を、過去の経験からこうなったのかもしれないと結びつける考え方がされていた。
- ・子どもの姿を自分なりに考察していた。あの時こうすればよかった、次はこうしていきたいと、援助や環境構成について振り返りをしていた。
- ・園内で事例の共有ができると、保育の視点が広がるのでやってみてほしい。
- ・どんな遊びを楽しんでいるのかメモをしておくと次につなげやすい。



環境メモ



ポイント

子どもの主体的な取り組みと保育者の環境づくり

①子どもたちが自由に関われる魅力的な素材・材料・教材

②本物との出会い心揺り動かす機会の工夫

➡大人が機会をつくっていく。

③友達と考えを伝え合ったり、共有したりする場と時間の保障

➡困ったことを助け合う、乗り越える経験が満足感や自信につながる。

④気持ちの切り替えができる場やくつろげる場

➡一人一人の状況を見極めて、理解をして環境を考える。

⑤興味をひきだしたり、自分の考えを試しりする場や時間

➡自分のペースで繰り返し取り組む時間の保障も必要である。

⑥興味・追求・探求を支える保育者の関わり

➡子どもたちの思いを受け止め、共感したり一緒に探求したりする。どんな場であるか、見直していくと良い。

⑦保護者や地域に保育を発信・共有するツール

➡子どもたちの経験している内容や育ちを伝える工夫として可視化し発信することで、理解や協力につながる。

⑧地域の教育力を取り入れる工夫

➡子どもたちに直接「専門家」と関われる工夫は、興味を深まらせ、好奇心や探求心を育むことにつながる。



保育の質向上のために 一人一人の健やかな成長のために
子どもの姿と保育者の関わりを語り合い、園で共有しましょう

主体的な姿とは？

子ども一人一人に視点を
当てて育ちを伝え合おう

幼保小接続期カリキュラムを
基に話し合う



子どもの姿を具体的な
場面で伝え合って共有
しよう

次の環境構成・保育者の
援助について語り合おう

子どもや保護者と
成長を喜び合おう

研修生の報告書より

一人一人の興味や発達を理解して保育者がどう関わっていくのか考えることが、子どもの意欲を引き出せるということを改めて感じた。その中で、子どもが自分で考えたり試したりしている時、保育者は見守るべきか援助すべきかを見極める難しさを感じた。



三角コーンを使った小さなハードルを作れる物を用意すると、子どもたち自身でコースを作り始めた。更にマットを敷いたりタイヤを置いたりしてコースを広げるなど、遊びが広がっていった。保育者は最初コースまで全て作らなければと思っていたが、子どもたちの発想だけで色々なコースが作れるのだと感じた。どんな用具や素材を用意したら「楽しそう」「やってみたい」という思いを引き出せるのか考えたり子どもの発想を受け止めたりすることが保育者にとって大切なことだと思った。